

派遣者番号	管R2K12	氏名	若月 憲
研究主題 —副主題—	グローバル人材育成のための古典教育における和歌教材の研究		
派遣先	東京学芸大学教職大学院	担当教官	黒石 陽子
所属	教育庁指導部指導企画課	所属長	小寺 康裕

キーワード：グローバル人材育成 国際バカロレア教育 和歌 本歌取り

## 1 研究の背景（目的）・主題設定の理由等

現在、我が国の教育において、グローバル人材の育成が課題となっている。平成28年の中央教育審議会の答申では、グローバル人材の資質・能力について「古典や歴史、芸術の学習等を通じて、日本人として大切にしてきた文化を積極的に享受し、我が国の伝統や文化を語り継承していけるようにすること、様々な国や地域について学ぶことを通じて、文化や考え方の多様性を理解し、多様な人々と協働していくことができるようにすることなどが重要である。」と指摘しており、グローバル人材の育成には、初等中等教育を通じた外国語教育だけでなく、我が国の伝統的な言語文化を扱う古典教育も含まれると考えられることが示唆されている。特に、国際的な文化交流の際の対話力等に関しては、単に外国語を使いこなせるだけでなく、伝えるべき中身があるかどうかということや、伝統的な文化が自己のアイデンティティーとどのように関連付けて捉えられているかということが重要になると考えられる。

本研究では、グローバル人材育成のために古典教育が果たすべき役割について論じるとともに、国際バカロレア教育の理念と学習のアプローチを援用して、古典教育において育成すべきコンピテンシーを明らかにした上で、和歌教材による学びを提案することを目的とする。

## 2 研究の方法

### (1) グローバル人材の育成

グローバル人材の育成において古典で育成すべき資質・能力について明らかにした上で、国際的な視野の育成やアイデンティティーの育成における国際バカロレア教育の理念、学習のアプローチの援用の具体的な方法について述べる。

### (2) 伝統的な言語文化の継承と創造について

伝統的な言語文化とは何かということについて考察し、古典作品や古典教材解釈のカノン化の現状を踏まえて、伝統的な言語文化を継承し、新たな言語文化を創造するための学びの方略について論じる。

### (3) 和歌教材の研究について

古典の中でも和歌教材を学習する意義について明らかにするとともに、和歌のテキスト解釈の方略について述べ、和歌の探究的な学びや本歌取りの和歌創作によって、グローバル人材育成のためのコンピテンシーをどのように育成するかについて論じる。

### (4) 授業実践の提案等

上記で論じた内容に関わる学習指導案を提示することにより授業実践の提案を行い、成果と課題について分析する。

## 3 研究の結果

まず、グローバル人材の育成において古典教育が育むべき資質・能力を「異文化に対する理解と日本人のアイデンティティー」と措定した上で、これまで古典教育において行われてきた「我が国」の伝統として古典を位置付けるといった意識を一旦棚上げすることによって、世界の多文化の一つとしてグローバルな文脈で古典を捉える学びとすることについて論じた。また、そのために、国際バカロレア教育の手法を援用し、アイデンティティーや文化といった概念理解を促す古典教育を実施することの重要性について言及した。そして、異文化理解を促すための方略として、本歌取りの和歌創作を行うことにより、伝統的な言語文化を自己のアイデンティティーと関連付けることができ、異文化を尊重する態度や異文化を理解しようとする資質・能力が育成され、ひいてはグローバル人材の育成に寄与することができるということについて明らかにした。

次に、伝統的な言語文化の学びとは何かということについて、学習指導要領解説を基に定義付けを行い、①単語レベルでの内包的意味の理解、②言語運用上のコノテーションの学習、③文学芸術としての古典学習の三つにまとめた。また、古典のカノンということについて先行研究を調査するとともに、カノン化の現状を古典教材並びに古典教材解釈の両面から明らかにした。その上で、学習者が上記の三つの学びを実現するために、和歌の本歌取りの創作

を行うことの意義について明らかにした。また、古典を「読むこと」の意義について、古典のテキストを探究する学びの必要性を説き、探究によって獲得した概念や世界観を用いて現代の世界を眺め、新たな文化的価値を創造していくこと、すなわち、古典のパラダイムを学ぶことによって、現代におけるパラダイムを明らかにした。新たな世界観の構築につなげることができる点に、現代文ではなく、古典を学ぶ意義を見いだすことができるということ論証した。

さらに、学習指導要領において和歌の修辞や文語による創作の学びが求められていることを受けて、近代短歌との比較から、コンテクストを探究する和歌教材を使用した学びの必要性を明らかにした。その方略として、コードを付して焦点化する読みやコンテクストとコードとの両面において補完的に読み解く学びの可能性に言及した。また、古典のテキストにおけるコノテーションについて解釈することが、現代社会の「解釈共同体」の「状況」を知ることや、解釈する学習者の「状況」をも反映するものであることを明らかにした。その上で、本歌取りの和歌を創作することは、古人の「心」を探究し、学習者のうちに生じた新たな「心」を歌として創造し記述することによって、学習者のアイデンティティを「垂直的布置」から捉える視点を獲得することができ、これまでとは異なる視点で世界を眺めることを可能にするということを明らかにした。そして、自己と現代文化とをメタ的に捉えることで、異文化理解を可能にする資質・能力が育まれるとともに、「よりよく生きる」ことを可能にする世界の創造に寄与するという点について論証した。

#### 4 研究の考察

古典教育は決して単なる過去の遺物を押し戴いて学ぶものではなく、現代の学習者が古典を探究し意味付ける過程で新たな世界観を獲得し、現代におけるより良い世界の創造に寄与する資質・能力を育むことができる学びである。また、古典研究は埃をかぶったテキストを扱う学問ではなく、現代のパラダイムを変革することをも可能にする価値の凝縮された宝の山ともいえる古典のテキストから、新たな現代的価値を発掘する学問であるということに言及した。

今回論じた和歌の探究的な学びや本歌取りの和歌創作の学びは、平成30年告示の「高等学校学習指導要領」における国語の新教科「古典探究」にて、探究的な学びや創作を主とした学びの方法として活用することができるのではないかとと思われる。特

に、高等学校の段階では、授業内における生徒の発言などがかなり限定的であると考えられるため、新教科においても、授業者と学習者との双方向の学びが実現しにくい環境となることが予想される。そのため、今回提案した探究的な学びの方略や創造を主とした学びの方略を授業計画の中に取り入れることにより、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善に貢献することができるのではないかと考える。

また、本研究のテーマであるグローバル人材の育成という観点で古典教育を考えることによって、これまで、外国語教育に特化して考えられていた国際理解教育の枠組を広く捉えることができ、現在の多文化共生社会に対応した資質・能力を育成する教育が実現されると考えられるのではないだろうか。

加えて、今回論証した古典教育や古典研究の意義が、高等学校の段階の生徒の古典嫌いの解消や、現代的価値に重きを置く現代の思考を変容させ、改めて古典的価値を考える契機となり、ひいては未来的価値ということに目を向けることを促すための一助となることを希望している。

#### 5 今後の展望

今年度は、昨年度末から続く新型コロナウイルス感染症の感染拡大という社会「状況」にあり、当初予定していた授業時数を確保することができなかった。そのため、授業実践の大部分を学習指導案という形で提案することとした。また、実施することができた授業実践についても、研究実施校の実情に合わせて、授業の実施時期を12月の学期末考査後の比較的時間の都合のつく期間とし、授業時間数についても、当初の予定から時間数を大幅に削減し、40分授業×2コマ(10分休憩を挟んだ連続授業)の実践とした。そのため、2コマ計80分間で収まる授業案を考え、本論稿の中心的な内容に当たる本歌取りの和歌の創作に焦点を絞った授業展開となっている。

本来であれば、事前調査・単元指導案に沿った授業の実践・授業経過ごとの調査・事後調査といったように、詳細なデータを取り、分析しなければ、学習者の変容を捉えて成果を検証することはできない。そのため、今後、学校現場における授業実践の中で本歌取りの和歌創作の学習による成果を検証していくことが課題である。